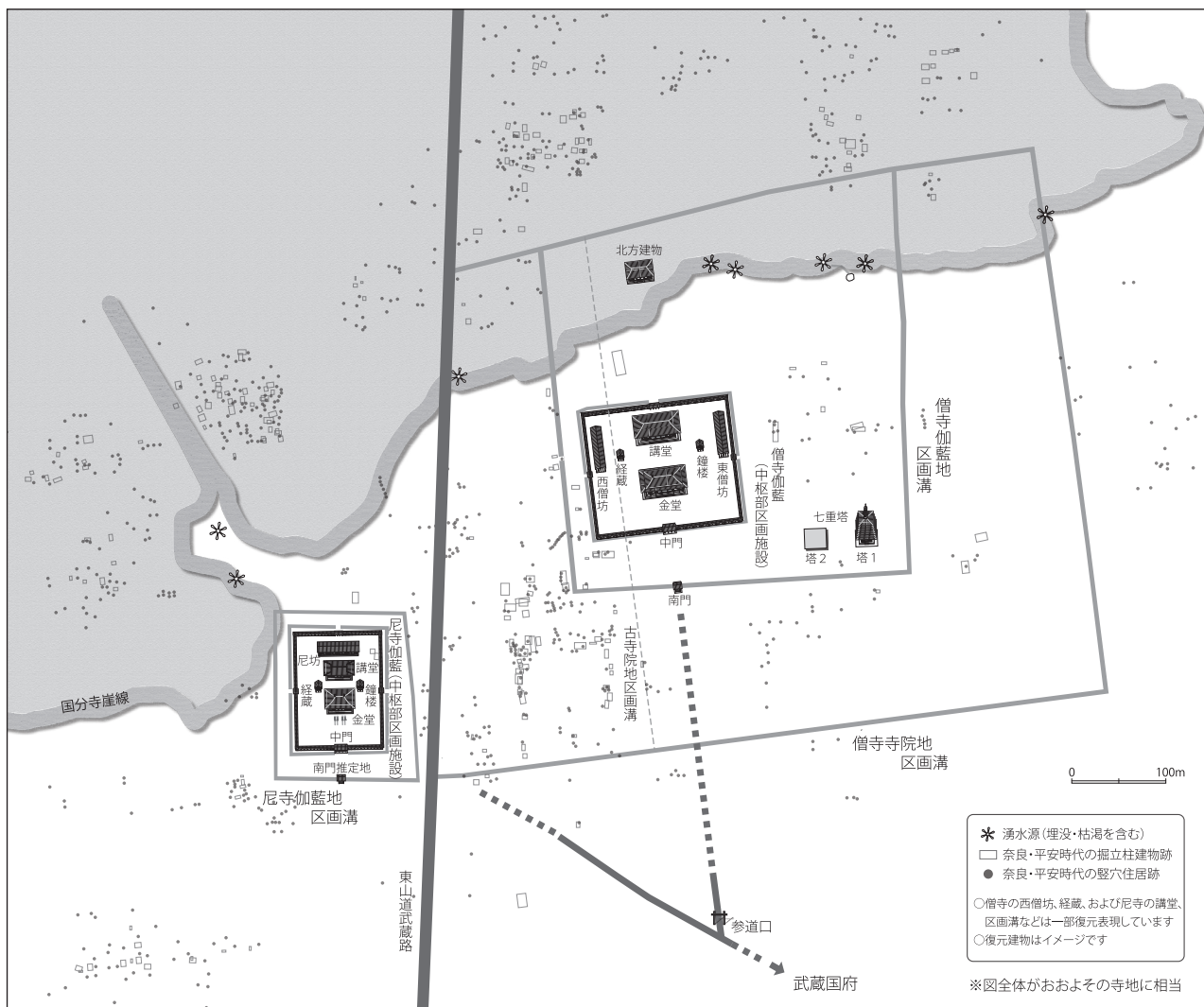
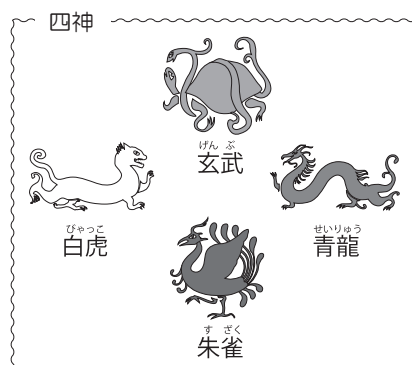


武蔵国分寺の建立

国分寺建立の好所条件

国分寺の造立にあたっては、国分寺建立の詔にあるように好所を選ぶことが命じられました。当時は帰国した遣唐使から、中国の四神相応思想が伝えられ、都のみならず国府や国分寺もこの思想が基本となって造営されたと考えられます。武蔵国では、①北には東西に連なる国分寺崖線と麓の清らかな湧水、②南には広大な平地、③西には南北を通る東山道武蔵路、④東には流れている川、などの条件を備えたこの地一帯が適地として選ばれました。



武蔵国分寺跡全体図

武蔵国分寺の変遷

昭和49年(1974)、史跡整備に関わる寺地・寺域確認を目的とした第一期調査が開始され、以降も継続的な発掘調査が行われています。調査によって、武蔵国分寺の主な建物(七重塔・金堂・講堂など)は、757年頃に完成し、造寺事業全体は詔からおよそ20年前後の757～765年の間に完了したものと推定されています。

そして、武蔵国分寺の規模は全国でも最大といわれる壮大な伽藍であったことが明らかになり、武蔵国分寺に関連する遺跡の規模は、僧・尼寺の周辺に群集する住居跡などを含めると東西約1.5km、南北1.0kmもの範囲に及び、また僧寺では3種の区画の変遷があったことなどがわかりました。

区画1：塔を中心とした真北から約7度西に傾く伽藍

区画2：区画1の西側の溝を埋め、中心を西へ200m移動させ西へ範囲を拡大、尼寺の区画も整備

区画3：寺院地区画を東山道まで延長する拡充整備

創建期(8世紀中頃～)

国分寺建立の詔によって造営が開始される時期

○区画1の寺院地が定められ、中心付近に塔を造立

僧・尼寺創建期(～8世紀末)

僧・尼寺の主要な建築物が造られる時期

○区画2もしくは区画3で、僧寺・尼寺の創建期および僧尼寺造寺計画の変更

○区画2もしくは区画3で、造寺事業完了

整備拡充期(9世紀代)

承和12年(845)を上限とする整備拡充期で、塔が再建されるもっとも整備されていた時期

○僧寺の規模 北辺627.7m、東辺580.2m、南辺716m、西辺534.7m(東山道武蔵路側)

○塔の再建に伴い、僧尼寺の主要建物を改修、整備

衰退期(10世紀中頃～11世紀末)

国分寺制度の衰退、区画溝が埋没する時期

○寺院地区画溝、伽藍地区画溝が埋没するとともに、竪穴住居が区画内に進出する

